

2歳児の比喩的再命名に関する日誌法的研究

——「基盤」の分析を中心に——

鈴木 情 一*

(平成3年10月31日受理)

要 旨

幼時期の比喩について、その原初的形態は「見立て」を言語的に表現したものであるとの前提にたつて、ある幼児の1歳11カ月から2歳9カ月までの「比喩的再命名」の事例を、観察・記録した。事例総数は464である。

比喩の構造を〔対象 (Topic) —【基盤 (Ground)】—媒体 (Vehicle)〕と規定し、対象と媒体とを「繋ぐ」ものとしての基盤の分析・検討をおこなった。

その結果、基盤は「感覚運動的な〔機能〕」から、「知覚変換にもとづく〔形態〕」へ、そして、〔感覚〕・〔感情〕等の多彩な基盤へと変化することが示された。

KEY WORDS

metaphorical renaming 比喩的再命名

pretending 見立て

GROUND

基盤

diary study 日誌法的研究

問 題

本研究は、鈴木(1986)に続いて、幼児の比喩的発達を日誌法的に追究するものである。以前の研究では、1歳11カ月から2歳10カ月までの幼児の比喩的再命名を特にその「言語標識」にもとづいて分析・類型化し、各類型の出現時に焦点を合わせて追究した。今回は、「媒体 (Vehicle)」と「対象 (Topic)」とを「繋ぐ」モノとしての「基盤 (Ground)」の分析を、分析の手法の検討を含めておこなう。

幼児の比喩の認定 一般の比喩はもちろんのこと、幼児期の比喩についても、まず問題になるのが「何をもって、比喩と認定するのか」という点である。この点については Winner (1979) がすでに簡潔なる定義を提出している。その定義とは次のようなものである：「メタファーとは、語を、その慣習的な指示物への類似性を基礎に、新奇な指示物へと拡張・使用することである」。

この定義を作業上の要素に分解すると、①幼児は、使用する語の慣習的な指示対象を「知っている」いなければならない、②「媒体」と「対象」とを「繋ぐ」ものがあり、それは両者の「類似性」である、さらに付け加えるならば、③幼児は、その語の慣習的な指示対象とは異なる物へその語を適用している、との意識 (メタ意識) を備えていなければならない、という3点に

* 幼児教育講座

なる。

①について、Winner (1979) は、当該対象物の「字義的な名称」を正しく使用していることを前提としている。例えば、「鉛筆」を〔箸〕に「見立てる（再命名する）」場合には、“えんぴつ”という名称を、比喩的再命名がなされる以前に、正しく使用している必要があるとしている。

しかしながら、「物」の理解はその「名称」を知っていることに限定されない。その社会的に与えられた機能や用途を「動作レベル」で理解しているという側面にも眼を向ける必要がある。スプーンを使って、スープを飲んでいる幼児は、すでにそのスプーンの「用途」を理解しているとも言えるのである。Winner (1979) の場合、「言語レベル」にこだわりすぎているとの感がある。物の理解を「動作レベル」と「言語レベル」に分けるならば、理解の水準を①動作レベルでも、言語レベルでも理解していない段階、①動作レベルでは理解しているが、当該「語」の理解及び産出が不可能な段階、そして③正しい使用法と同時に、正しい表現が可能な段階という3つの段階（さらには、メタレベル）を設定し、各段階との関係を検討すべきである。

②の「基盤」については、「類似性の意識」が問題となるが、Winner の場合、仮説的な前提として処理されている。問題とすべきはむしろ、単純な類似性だけにもとづいて、幼児期の比喩が、すべて説明できるのか、という点にある。この問題は「基盤」についての検討部分と「比例型の比喩（The Proportional Metaphor）」の解説部分でふれることにする。

最後の、③については、「比喩的意識」又は「たとえている意識」が問題となる。が、すでに Billow (1981) では、2歳後半から3歳前半の幼児では、「たとえ」意識が存在することを明らかにしているし、同様に、Mendelsohn, Robinson, Gardner, & Winner (1984) でも、4歳ですでに明確な範疇違反であるとの意識を有していることを明らかにしているため、特に問題としない。

「基盤」について Winner (1979) が分析に使用した基盤は次のようなものである。

- ①「輪郭 (Contour)」: 「鉛筆」を“大きな針”と呼ぶ—2歳7カ月
- ②「空間的配置 (Spatial Configuration)」: 2つの重なったアルファベットを“アダムがお父さんの上で寝ている”—3歳3カ月
- ③「色彩 (Colour)」: 「髪の毛」を“暗い森”と称した—2歳10カ月
- ④「大きさ (Size)」: 「小さな風船」を“かわいい赤ちゃん”—2歳10カ月
- ⑤「音声 (Sound)」: 小さなブロックを床の上に落とす。「音」をたてる。それを聴いて“聴いて、いやな皿だね!”—2歳5カ月
- ⑥「動き (Motion)」: 「こま」を“蛇みたいによろめいているよ”—4歳10カ月
- ⑦「手触り (Texture)」: 「クラッカー」のくずを“ごみの山”—4歳10カ月
- ⑧「機能 (Function)」: マイクの「コード」の下を這い回りながら、“トンネル”—2歳7カ月
- ⑨「感情 (Affect)」: 離れてある「おはじき」を“寂しいやつ”—4歳7カ月
- ⑩「複合基盤 (The Multiple-grounded Metaphor)」

Winner (1979) のこれら基盤の判定は、上の例の①を除くと、その基準が「言語表現」にあるため、年齢的に見て早い時期に始まる「見立て／ふり」に伴う又は前後する比喩的再命名を見逃している可能性が高い。本研究では、「見立て」・「ふり」との関係性をより前面に出し、比喩的再命名の「原型」にせまっていく。「見立て」と「ふり」に関する最近の研究は鈴木・小林(1986)

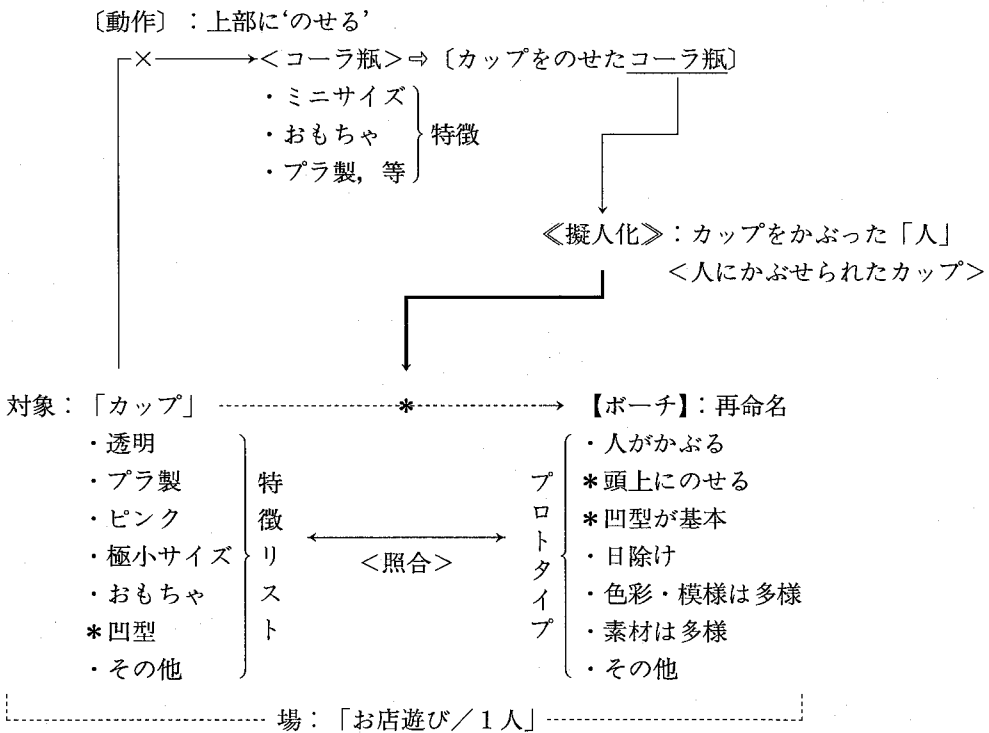
に要約されている。

さらに、最近では、大竹 (1985, 1986), Gentner (1988) 等の研究から、「知覚的類似性」にもとづく比喩の理解は「抽象的類似性」や「関係の類似性」にもとづく比喩の理解よりも早い時期から可能であることがわかっている。ただし、これらの研究は実験・調査法によるものであり、対象年齢も高く、直接参考にはならない。

基盤の「判定法」 対象児の<827日齢>の事例をもとに解説する。

(827日)：キティちゃんのお店ごっこで遊んでいる。おもちゃのコーラ瓶に、これもおもちゃのカップをかぶせた後で、“あっ、ボーチかぶってる！”と言った。

「カップ」を「コーラ瓶」にかぶせ、“ボーチ”(帽子)と再命名した事例である。分析手続きを図式化すると、以下のようになる。



この分析図を参考に、「カップ」を〔ボーチ〕に見立て、再命名する条件を抽出していくと、次のようになる。

- ①コーラ瓶……………関与的事物
- ②カップ……………焦点的事物 (Topic)
- ③‘のせる (かぶせる)’という行為……………実現動作／帽子の動作的機能
- ④のせる位置が上部……………位置関係
- ⑤カップと〔ボーチ〕の「類似点」……………「帽子」のプロトタイプ属性とカップの共通点 (基本は「知覚的」属性)；*印

⑥「場」の条件……………「お店遊び」：単なる配列であった。

注 “ポーチ”と呼称する幼児の「帽子」にかんするプロトタイプは、成人のそれと異なっている可能性が高い。ここから、「般（汎）化」の問題が生じる。

分析のポイント：①「カップ」をくコーラ瓶>に‘のせる（かぶせる）’動作の後で、初めて“ポーチ”の見立て（そして、再命名）が成立したと仮定するならば、‘のせる（かぶせる）’という動作が必要条件となる。さらに、この動作が「かぶっている」状態を「構成」するための動作なのか、「かぶる」という Pretend Action なのか、判定不能である。

Winner (1979) では、〔機能〕が基盤となる。

- ②「カップ」又はその類似物を、この再命名の前後の時期に、足の下等に置いて、“クック（靴）”といった再命名がなされていれば、コーラ瓶の「上部」という「位置」が条件となる。
- ③「カップ」と「ポーチ」との「類似点」が付加の特徴であるか、必要条件であるかの判断は、“ポーチ”という命名（見立て）に関する他の（年齢的に前後する）事例の検討が必要である。なぜならば、〔機能〕だけで、基盤たりえるからである。
- ④“ポーチ”という命名の指示対象（事象）が問題である。「帽子」単体とも、「帽子をかぶっている」など、その指示的意味が厳密には判定不能である。この判断は、今後「表現面」に形式的に依存しておこなう。
- ⑤「コーラ瓶」が同様に、必要条件であったのか、‘のせる（かぶせる）’対象のカテゴリー分類が必要である。「人間」—「動物」—「人形」—「静物」等。
- ⑥「場」の条件については、この遊びでは人形等が使われていなかったの
で、直接関わりはない、と判断しておく。ただし、「遊び」の場の内での
ことであり、見立て（再命名）「喚起」の間接条件たりえる。

ここで問題となるのは、「基盤を1つに定める」ことである。結論から言うならば、1つの偶発的に起こったとも言える事例から、「単一の」基盤を決定することは困難である。もちろん、事例によっては、可能である場合もある。例えば、「ただの紙片」を1枚、自分の頭の上ののせて、“ポーチ”といったような場合は、‘のせる’という動作が必要条件である、と判定せざるを得ない。ただし、この場合であっても、その同じ紙片を見ただけで“ポーチ”という事例が以前になければ、の前提条件つきである。

本研究では、操作上、各事例について、収集者（父親）と母親の「合議」により、必要な基盤を抽出したが、その場合でも、「単一の」基盤に限定することはあえてしなかった。なお、上記の事例は「カップ」⇒「ポーチ」；〔【機能+形態】+静物（コーラ瓶）〕と分析され、基盤は【機能+形態】となる。なお、必要に応じて新たな基盤を追加していくことにした。

その他の問題 ①事前の「イメージ」により「喚起」されたのか、‘のせる’といった「帽子」に内在する機能的動作が「再命名」を引き出したのか、それとも‘のせる’のは、単なる「構成」動作であり、その結果（的状態）が、見立てのみならず、再命名を喚起したのか、といった

問題がある。

②さらに、言語化するという「表現」の問題がある。それは「伝達」,「共有」,それ自体を楽しむ「遊び」,いずれにしる,字義的名称又は字義的操作を「乗り越え (Override)」させる,又はする契機をなすものは何なのか,それとも,彼らの「ことば」の本性に根差した特徴なのか?

③ Winner (1979) では,“2つの要素を繋ぐものは,隣接性にもとづく連想であってはならない……”と述べ,いわゆる「換喩」(と「提喩」)を当初から除外している。しかしながら,幼児の比喩(的再命名)を具体的・個別的に分析し,検討をくわえていくなれば,必ず「換喩的操作/再命名」(又は,提喩的再命名)に遭遇することになる。比喩的思考にとって重要なのは,実は「隠喩」,「直喩」,「換喩」,「提喩」といった比喩の類型のみならず,擬人化,擬物化,換称,誇張法といったレトリックの技法に反映される認識全般なのである。

現実世界の経験的隣接関係にもとづく「換喩」,意味・概念世界を上下する「提喩」を,現実世界と意味世界とをつなぐ「掛け橋」としての隠喩にくわえ,幼児の比喩的世界を追究する必要がある(佐藤,1978,等;瀬戸,1986;中村,1991;Mac Cormac,1985等々を参照)。

目的 本稿の目的は,1歳11か月より2歳10か月を中心とした幼児の「見立て」に伴う比喩的再命名を,その「基盤」に焦点をおいて分析・検討し,「対象(Topic)」と「媒体(Vehicle)」とを「繋ぐもの」とその変化を明らかにすることにある。

方 法

鈴木(1986)に詳細を記載したので,ここでは要点のみを記することにする。

被験児 3人姉妹の2女で,1980年10月17日生まれ。正常出産で,発達的にも順調である。

観察期間 準備期間を含めると,1歳11か月より3歳1か月までであるが,組織的観察期間は2歳10か月までである。

観察方法 父親による日誌法的観察。事象を単位とし,比喩的再命名の対象物とそれに関連する幼児の行動・動作等を,その発話とともに観察・記録した。父親,母親等の発話や行動等,彼女の見立て(再命名)に影響を及ぼしたと考えられるものも並記してある。さらに,直接の「対象」となる事物については,絵図や写真として記録に留めた。なお,ビデオ,カセット・レコーダーによる記録も一部併用したが,参考資料に留めた。

観察時間 被験児の自然な生活状態での発話収集を目標とし,平日は朝の1時間,夜の3時間を基本観察時間帯とした。なお,日曜日と祝祭日は1日としている。

収集条件 対象を動作レベルで知っていること,又は対象の字義的名称を正しく使用していることを標本の基本条件としている。なお,「呼称(再命名)」を伴わない「見立て」や「ふり」についても収集してあるが,分析対象としては,除外してある。

観察・記録上の諸注意 父親,母親等の直後再生模倣と判断したものは記録していない。遊びを組織立てない,等。

結果と考察

観察・記録した単位は「事象」であるが、再命名を分析対象とするので、1つの事象に複数の再命名が含まれる場合がある。今回は、元の記録をすべて新たに分析し直した。その結果として得られた464個の事例を分析の対象母集団とする。なお、直接の分析対象はその都度示すことにする。記録・分析の範囲は708日～1144日である。

1. “ボーチ (帽子)” と “ペッペ (お風呂)” の追跡

表1. “ボーチ (帽子)” の分析結果

日齢	対象	再命名	分 折
① 708	容器	⇒ [ボーチ] / {	[<状況> 【機能+形態】+人間 (父親)]; 質問
② 711	葉	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (父親)]; 質問
③ 720	座蒲団	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
④ 720	座蒲団	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑤ 756	容器	⇒ [ボーチ] / {	【形態】]; 質問
⑥ 767	ベルト	⇒ [ボーチ] / {	{ 【機能】+形態}+人間 (母親)
⑦ 770	ハンカチ	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑧ 783	ふた	⇒ [ボーチ] / {	【機能+形態】+人間 (自分))
⑨ 789	枕	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑩ 799	ネット	⇒ [ボーチ] / {	【形態】]
⑪ 809	シャトル	⇒ [ボーチ] / {	[<構成> 【機能】+形態]+静物 (シャトル))
⑫ 825	煎餅	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑬ 827	カップ	⇒ [ボーチ] / {	[<構成> 【機能+形態】+静物 (瓶))
⑭ 842	紙	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人形 (キティ))
⑮ 857	レゴ	⇒ [ボーチ] / {	[<構成> 【機能】+静物 (ボール))
⑯ 857*	レゴ	⇒ [ボーチ] / {	[<構成> 【機能】; {[形態]+静物 (ボール)}]
⑰ 870	箱	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑱ 891	新聞紙	⇒ [ボーチ] / {	【機能】+人間 (自分))
⑲ 958	カゴ	⇒ [ボーチ] / {	【機能+形態】+人間 (自分))
⑳ 962	容器	⇒ [ボーチ] / {	【機能+形態】+動物・人形

注1. 「857*」は、「ボール」を〔形態〕にもとづいて「ダルマ」にした「2重の見立て」の例である。発話は“ダルマさんのボーチ”。

この表に示される結果でまず注意すべき点は、最初の2つの事例とその後の2つの事例とである。

①と②については、父親が対象物を自分の頭上にのせ、“これ何?”と質問し、その答えを記述したものである。さらに②については、最初に「葉」を見せ、“これ何”と質問している。この場合の発話は“ハッパ”であり、字義的な命名となっている。従って、彼女は1歳11カ月のこの時点ですでに、字義的名称を知っており、かつ父親が「頭上にのせる」という行為をすることによって、非字義的な回答を求めている、との認識を備えていることになるのである。この2事例では、父親が「喚起」した場合であるが、後の2事例では、彼女自身が「自分の頭上に

のせる」という行為をおこない、かつその上で“ボーチ”という再命名を「自発的に」おこなっているのである。しかしながら、これらの4事例はいずれも‘のせる’という行為を媒介にした再命名（見立て）である。

言い換えるならば、これらの事例はいずれも、「(人間)の上へのせる／置く」という動作をおこなった後の、いわゆる「行為メタファー (Action Metaphor)」に過ぎない。

Winner (1979) で問題にされていた「行為を伴わない」純粋な「知覚的変換」とそれにもとづく「再命名 (比喩的再命名)」は、799日 (約2歳2カ月) を待たねばならない。この(⑩)事例は、彼女が蜜柑の入っていたネットを見つけて、手にした直後に“ボーチ”と命名したものである。さらにこの直後に、そのネットを自分で自分の頭にかぶせるという行為 (Pretend Action) をおこなっている。なお、行為が「命名後」であることに注意する必要がある。

この事例は、対象(「ネット」)を見るだけで、すなわち「知覚レベル」で、対象の「予期的動作図式」、村上(1985)をふまえるならば、「感覚運動的図式」が喚起され、その図式にもとづいて見立てと再命名ができることを示している。「比喩」の直接の発生的起源はこの「知覚的変換」に求める必要がある。

さて、⑩までの事例は、“ボーチ”に関与する対象がすべて「人間」であったが、⑪(809日齢)よりその対象が変化している。⑪の事例は、スカイピンボンの羽のゴムの部分を上にして置き、その上にバトミントンのシャトルをのせた後でシャトルを指して命名したものである。いずれにしろ、「～の上へのせる／位置する」ことが“ボーチ”の再命名(見立て)に大きく関与していると要約できる。のせる対象は、「人間」から「人形」「静物」へと拡大していく。

表2の分析結果を概観すると、「お風呂」に‘入れる’行為又は動作をともなう事例が大半である。そして、その多くが、〔機能〕と〔形態〕の類似性にもとづくものである。この2つ以外の基盤は⑧と⑨でようやく出現する。この事例は、「布団の中で、“ベットのペッペ、あったかいね!”」というものである。Winner (1979) の分析法をそのまま適用すると、“あったかいね”という言語標識にもとづいて、〔触覚 (感覚)〕となる。

しかしながら、本研究では、彼女のように分析を言語レベルにだけ限定しないようにしているために、‘入る’という被観察者の動作をふまえ、〔機能+感覚〕として分析しておいた。いずれにしろ、794日目で〔触覚 (感覚)〕という新たな基盤が出現したことになる。

同じ〔感覚〕でも839日の事例では、人形を積み木の中に入れ、“ペッペ、あったかいね!”と言っている。Pretend Action Metaphor ではあるが、ここでは、この事例を基盤としての〔感覚〕の典型が出現した事例としておく。

では、行為・動作を伴わない純粋な「知覚」による変換を認めることのできる事例を、この“ペッペ(お風呂)”の事例の中から深すとすれば、どの事例になるのか。1つの候補者は⑬(897)の絵本での事例である。この事例は、父親と絵本を見ていて、父親が、“箱に入ってるね”と言った後で、“ちがうよ、ペッペにはいってるんだよ!”と父親の表現を修正した時の発話である。絵本の絵には、先のページでダンボールが描かれており、次に赤ちゃんがダンボールの中に入っている絵が続く。この後の絵を見ての発話である。絵の内容を重視して、上記のように基盤を抽出したが、彼女自身の行為もなく、人形等を‘入れる’という行為もない。その上、赤ちゃんが‘入りつつある’場面があるわけではない。しかしながら、彼女の“はいっている”という表現をふまえるならば、この比喩的再命名は「知覚的変換」にもとづきながらも、‘はいる’という〔機能〕を媒介にしたものであると考えられよう。

表2. “ベッペ (風呂)” の分析結果

日 齢	対 象	再命名	分 折
① 709	ダンボール	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+人間 (自分)]; 質問
② 714	カゴ	⇒ [ベッペ] /	[<状況> 【機能+形態】+動物 (人形)]; 質問
③ 756	容器	⇒ [ベッペ] /	【形態+機能】
④ 770*	キャップ	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+湯+人形]; 質問
⑤ 770*	キャップ	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+湯+人形]
⑥ 783	ふた	⇒ [ベッペ] /	【機能+形態】+人形]
⑦ 791	バケツ	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+湯+人間 (自分)]
⑧ 794*	ベット	⇒ [ベッペ] /	【機能+感覚】+人間 (自分)]
⑨ 794*	こたつ	⇒ [ベッペ] /	【機能+感覚】+人間 (自分)]
⑩ 833	箱	⇒ [ベッペ] /	【機能+形態】+人形]
⑪ 839*	積み木	⇒ [ベッペ] /	【感覚】+人形]
⑫ 839	積み木	⇒ [ベッペ] /	【形態+機能】+人形]
⑬ 887	型抜き	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+ (湯)+人形]
⑭ 887	箱	⇒ [ベッペ] /	[<遊び> 【機能+形態】+ (湯)+人形]
⑮ 897	ダンボール	⇒ [ベッペ] /	[<絵本> 【機能+形態】+人間]
⑯ 912	水溜まり	⇒ [ベッペ] /	[<想起> 【機能】+鳩]
⑰ 944	川 (水)	⇒ [ベッペ] /	【機能】+鳥]
⑱ 962	容器	⇒ [おふろ] /	【機能+形態】+人形]

注1. ④の発話は、“ボーチのベッペ”で、シャンプーのキャップが帽子型をしている。

2. ⑤の発話は、“ボートのベッペ”で、「2重の再命名 (見立て)」である。

3. ⑧と⑨の発話は、“ベット (こたつ) のベッペ、あったかいよ”。Winner の方式では、〔感覚 (触覚)〕となるが、ここでは、彼女自身が「入る/入っている」ので、〔機能〕を加えた。

4. ⑪の発話では、キティ人形を「入れて」、 “ベッペ、あったかいね” である。

5. <絵本>は絵本の絵を見ての発話である。“……ベッペには入ってるんだよ”

6. ⑬と⑭の (湯) は、呼称はされないが、動作レベルで「水を入れる」「ふり」をしている。タンスの前が「水道」とされ、“ジャー”という擬音後により「入れる」動作を表出している。

2. 「比例型比喩的再命名 (The Proportional Metaphor)」について

比例型メタファーと呼ばれる比喩は、その理解も産出も、幼児には困難であると言われている (岩田, 1991)。岩田の挙げた例では、「君の頭は芯なしのリンゴだ」というものがそれにあたり、「関係の類似」(頭:リンゴ=脳:芯)を基礎 (基盤) におく比喩である。

確かに、この例のような比喩を幼児が理解したり、産出したりするのは、困難であるが、その「原型」をなしていると考えられる「構造的対応関係」にもとづく比喩の例は幼児期の比較的早い時期に出現している。次の事例を分析・検討してみる。

例1. (940日): 朝, 1人で目覚める。母親がやって来て、布団の中にいる彼女 (被観察者) の足の裏をくすぐると、“ママ, モグラさんだ”と言った。その後、今度は父親がやって来て、同じように足の裏をくすぐると、“イッタン, くすぐったいよ,” 続いて“イッタン, モグラさ

ん！！”と言った。

父親に対する後の発話は、「役割交換」を主張しているものである。この事例は、実は絵本の内容からの類推によるものである。絵本の中では、「モグラ」が「くすぐる」役であり、「熊」が「くすぐられる」役である。絵本の中の絵の構造と、彼女の発話（の背景をなす）構造とを図式化すると、次の図ようになる。

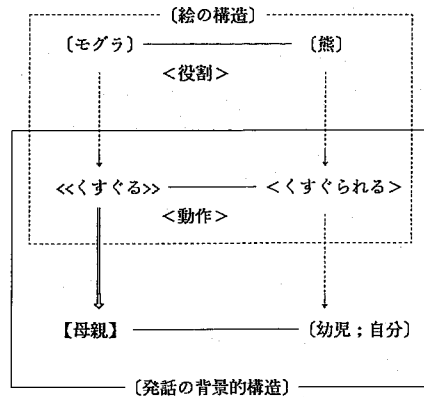
この図からわかるように、Winner 流（これまでの著者の分析法では、母親の「くすぐる」という動作が、母親を「モグラ」とみなす契機となっており、基盤は（母親の）〔動作／機能〕となる。

しかしながら、この発話を支えている「絵本」の「絵」の構造を分析するならば、母親を「モグラ」に見立てる背景が、実は構造的な図式の写像（構造的対応）であることがわかる。

さらに、この図式から出発するならば、発話（表現）内容が問題となろう。この発話と選択肢の関係（パラダイグマティックな関係）にある発話を考えてみると「イッタン、クマさんじゃないよ／クマさんになっちゃうよ！」が代表的なものであろう。「発話（言葉）は、それ自体が常にある1つの視点（観点）をあらわす」、「認知的定位（この場合は、絵の登場人物への定位）は、動作主に置かれるのが通常である」、この2つのテーゼが彼女の発話の選択（？）を説明する。

同様の事例は、後に述べる「発話の時期」の第8期と9期に、合計5事例が認められた。さらに、絵本と絵が同定できなかったため、構造的対応として類型化しなかった例が952日目に1つある。

その中で、995日の事例は、複雑な鉄骨構造にロープを張って作った巨大な遊具の中に入り、その直後に出てきて、“ユーコ、クモ（蜘蛛）じゃないよ”と言った例である。



3. 同一物の「連続的再命名」

同一の対象物を、次々と別のモノに見立てる（再命名する）事例は、条件により異なるが、多く認められた。

初期の事例としては、父親が「葉」を見せて“これ、何？”と問うた後に、それを身体の幾つかの部分に置いて（動作）、同じように“これ、何？”聞いたものがある。711日の事例の中で、まず「葉」を1枚見せて“これ、何？”と聞くと、“ア（ハ）ッパ”と答えた。次に、父親が自分の「胸」に2枚の葉をつけ、聞くと“パイパイ”，そして、1枚を頭上にのせて、聞くと“ポーチ”と答えた。

この事例では、父親が「頭の上」／「胸」に「置く／つける」という動作が彼女の「見立て（再命名）」を喚起したことになる。生後711日目で、すでに「再命名」が可能なのである。言い換えると、父親の「動作」と対象を置く「位置」とによって「字義の世界」から「非字義の世界」への飛躍が可能なのである。

自発的な連続的再命名の事例で、彼女自身の動作・行為・操作を含まないものは、799日目の風呂場での遊びに見られる。その事例では、「タオル」が「おうちのタオル」から始まって、「オ

ヤマ, 「イス」, 「デンチャ」, そして「ヘビ」へと連続的に変化していく。ただし, 後の2つの命名は父親がタオルを操作・変形した後のものである。

さらに, 折り紙という「内在的機能」と「内在的形態」を有しない素材を使った再命名の事例は, 795日の1人遊びで確認されている。そこでは, 彼女の「構成」や「操作」によって, 折り紙が「オチャカナ」, 「オフトン」, 「シャツ」へと連続的に変化している。

4. 全事例の集計結果

観察・記録した再命名のうち, 最初の8つの事例(708~714日齢)は, 父親が意図的・計画的におこなった, いわゆる「小実験」的なものであり, この集計から除外した。集計の対象となった事例は, 456であり, その日齢と基盤とのクロス分類を表3に示す。

表3は, Winner(1979)の提案した基盤の定義を一部修正し, かつ出現した事例を説明するために必要と思われる新たな基盤をくわえ, 456の事例を分類したものである。

「基盤」の類型にあたる部分は, [機能], [形態], [感覚・感情等], [その他]という4つのブロックに大きく分割した。[機能]群と[形態]群については, 類似したものをまとめたものである。「日齢による時期」は, 30日(約1カ月)を単位として, 大きく11の「時期」に分類したものである。なお, 注2にあるように, 「時期区分」は, それぞれの「時期」において, 最初に記録したものと最後に記録したものの日齢で示してある。

「基盤」について Winner(1979)で曖昧であった部分を修正し, 新たに提出した定義と, 新しく加えた基盤の定義について述べておく。

[輪郭]: 純粋な外観的「形」(線画を想起されたい)にのみ依存する。

[配置]: 2つの対象の内, 一方についてのみ「命名」がある場合も, 両者の空間的・時間的關係が「命名」の必要条件と見做される場合

[形態]: 基本ではあるが, その他の特性等も付随すると見做した場合

[機能]: その対象を用いて, 媒体(Vehicle)に準じた動作を, 幼児自身/父親等周辺的人物がおこなった後で「再命名」がなされた場合。加えて, 人形等により, その種の動作等をおこなった場合を含む

[動き]: 幼児自身, 又は父親等によるものの外に自然発生的な動き。機能に類似

[動作]: 幼児自身, 又は父親等の「仕種」によるもの

[配置]: 並んだ形やその平面空間的な形

[場の設定]: 動物園等の空間のみを指定する

[役割配当]: 人物等に, ある名称・役柄等を付与する

[位置]: 身体や空間のある場所(位置)が焦点となる

[様態]: “パパ, しんじゃった(死んでいる)”といった状態(人物)

その他[抽象]等については, 参考文献を参照されたい。

さらに, 11の時期区分別に4つのブロックの比率を算出したものを挙げておく(表4)。

表3, 4に示した基盤別, 又はブロック別の出現度数と相対比率が数字としてどの程度の意味をもつのか判断しがたいが, 「被観察児の母集団たる比喩的再命名より「適切」に標本抽出された」と仮定し, 議論を進めていくことにする。

分析・検討に大きく2つの観点が準備される。①各基盤, 及び各ブロックの「出現日齢」, と「出現順序」, そして②各時期区分別の相対頻度, である。

表3. 「基盤」の類型と時期別の出現数(456事例)

基 盤	日 齢 に よ る 時 期											合計	比率*
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
[機能]	4	9	3	6	8	13	12	11	4	5	1	76	16.7
[動き/機能]	1	2	2	—	—	1	0	2	1	1	—	10	2.2
[動き+形態]	—	—	—	2	1	3	5	1	1	—	—	13	2.9
[機能+感覚]	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2	0.4
[機能+形態]	1	12	11	10	9	10	3	8	10	3	—	77	16.9
[機能+音声]	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	2	0.4
# [機能/動作]	—	—	—	—	—	—	—	3	2	—	—	5	1.1
[機能+SIZE]	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	0.2
[形態+動き]	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	2	0.4
小 計	6	23	18	18	18	28	21	26	18	11	1	188	41.2
[形態]	2	16	26	15	20	17	32	10	7	8	7	160	35.1
[形態+色彩]	—	1	—	1	—	2	5	1	1	1	—	12	2.6
[形態+位置]	—	2	—	1	—	—	2	—	2	—	—	7	1.5
[形態+機能]	—	2	2	5	7	3	4	3	3	3	—	32	7.0
[輪郭]	1	1	—	—	1	—	—	—	1	3	2	9	2.0
[配置]	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	0.2
[配列]	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	0.2
[色彩+形態]	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	0.2
[形態+SIZE]	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	0.2
[形態+感覚]	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	—	4	0.9
小 計	3	22	28	23	30	22	46	16	14	15	9	228	50.0
[感覚]	—	—	—	1	—	1	3	1	1	—	—	7	1.5
[感覚+位置]	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	2	0.4
[感情]	—	—	—	—	—	—	3	2	4	—	—	9	2.0
[感覚+感情]	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	0.2
[色彩]	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	3	0.7
[音声]	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	4	0.9
[抽象]	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	0.2
[場の設定]	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	3	0.7
[位置]	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	0.2
[役割配当]	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	0.2
[様態]	—	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—	3	0.7
[ケイタイ・キノウ・シキサイ]	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	0.2
【換喩】	—	—	—	1	—	1	—	—	2	—	—	4	0.9
合 計	9	46	46	43	49	54	78	50	45	26	10	456	

注1. 「#」印は、Proportional Metaphorである。

2. 日齢による「時期」区分。事例出現時期による。

①720-749, ②750-778, ③782-809, ④812-841, ⑤842-871, ⑥872-901, ⑦902-931,
⑧932-960, ⑨962-991, ⑩993-1019, ⑪1029-1144

3. 「比率」は、総計に対する割合を示す。

表4. 時期区分別にみた4ブロックの相対比率(%)

	日 齢 に よ る 時 期 区 分										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
〔機能〕群	66.7	50.0	39.1	41.9	36.7	51.9	26.9	52.0	40.0	42.3	10.0
〔形態〕群	33.3	47.8	60.9	53.5	61.2	40.7	59.0	32.0	31.1	57.7	90.0
〔感覚〕群	—	—	—	2.3	2.0	3.7	12.8	12.0	15.6	—	—
その他	—	2.2	—	2.3	—	3.7	1.3	4.0	13.3	—	—

まず、ブロック別に出現順序及び出現時期について概観してみる。すると、表3、4の結果より、次のような出現順序が読み取れよう。

〔機能〕群⇒〔形態〕群⇒〔感覚・感情〕群⇒〔その他〕

すでにこの観察・記録を開始した時期には、〔機能〕が登場しており、その開始時期は、感覚運動期の後半にあるのかもしれない。〔形態〕群についても、対象物が限定されているとはいえ、後に述べるように、726日には、形態のみにもとづく比喩的再命名が出現しており、結果的には、観察開始時期が遅かったと言えよう。

〔感覚・感情〕群が安定して出現するのは、おおむね第7期以降である。この群は、〔その他〕の群と同様、絶対量が少なく、やはり、定義上の問題、判定の問題を含め、再検討が必要であろう。

次に、観察・記録した年齢範囲内の各基盤の初出日齢を、それぞれの定義内における可能な限りの厳密な基準で調べてみる。ただし、主要な基盤にのみ限定することにする。

〔機能〕については、すでに714日の時点で確認されている。既述したように、この時期ですでに「字義的名称」と動作・行為をとまなう「再命名(見立て)」が、少なくとも、一部の対象については可能であった。

〔形態〕については、再命名後に Pretend Action をとまなうとはいえ、726日の日齢でボーリングの「ピン」を“ピンピンパイパイ(哺乳瓶等)”と命名している。事前・事後に Pretend Action をとまなわない知覚的再命名は、758日の「バナナ」を“フネ”と再命名した事例が挙げられる。いずれにしろ、〔機能〕よりは遅い出現となる。

〔感覚〕では、839日目に人形を積み木の内に入れ、“ペッペ、あったかいね!”と称する事例が認められている。動作をとまなわないものとしては、904日に、姉が隣の部屋で点けたスタンド(の光)を見て、“あったかい”と言った例が挙げられる。

〔音声〕も、感覚と同時期である。903日に寝床で戸外の音(?)を聴いて、“モーモー(牛)のこえかな!?”と言った例がそれにあたる。事実、牛のように聞こえたのではないか、という疑いは、多少とも拭いきれないので、言語レベルで表現された事例を求めると、916日目の、テレビの人物を見ながら、“さとこだ、にてるよ、こえがにてるよ”という事例を挙げておく。

〔感情〕は、言語レベルに求めざるをえない。916日目に、「アヒル」を自分に見立て、“イッタン、……ないてるんだよ”という事例が出現した。同じ916日に同様の表現が他に1つ認められている。

〔場面設定〕は、事前の動作や行為以前に、ある空間(場所)を、指定するものであるが、947日目に「床の間」を指して、“ここ、どうぶつえん”と父親に言った事例がある。969日にも

出現している。

〔抽象〕は、その定義が困難ではあるが、936日の、父親を「邪魔もの扱い」した“パパ、ゴミさん”という事例がそれにあたらう。

以上の結果を、事前・事後に Pretend Action があつたかどうかを無視した場合についてまとめると、〔機能〕⇒〔形態〕⇒〔感覚／色彩〕⇒〔音声〕⇒〔感情〕⇒〔抽象／比例型の原型／場面設定〕となる。

相対頻度の問題は、上記したような標本抽出の適切性に関する疑義が残り、統計的処理が適用できないので、さらに多くの困難を抱えている。集計された結果にもとづくならば、概観的な要点は以下のようにまとめられる。

①第1, 2期は、〔機能〕群が〔形態〕群より多く認められる。が、第3期以後に逆転し、〔形態〕群が優勢になる。

②第6, 8, 9期では再び〔機能〕群が多くなるが、〔機能〕と〔形態〕を単独に比較した結果を合わせ、みてるならば、その大半において〔形態〕が〔機能〕を凌ぐ、又は同程度出現している。その原因は〔形態+機能〕と〔機能+形態〕との間の差に依る。

③〔感覚・感情〕群は、第6期から7期にかけて急増するが、9期に山をむかえ、その後、出現していない。なお、標本数の少ない11期は除外して考えたほうがよい。

これまでの文献で確認されたことを含め、これまでの結果を要約すると、感覚運動的な動作・行為に基盤をおく〔機能〕的な基盤に始まり、次に知覚的変換にもとづく〔形態〕が出現、ついで2歳半前後に〔感覚・感情〕を含む多様な基盤が登場する、となるであろう。

5. 残された問題

残された問題は数多いが、収録した事例をもとに考えてみると、まず「対象」となっていた事物・事象の類型化をおこない、その類型化と「媒体／喩詞 (Vehicle)」の変換可能性との関係を分析する課題がある。例えば、「積み木」や「折り紙」といった「素材」的な物と「茶碗」のような機能や形態がある範囲とはいえ、社会的に規定されている物などを区別して、「媒体」との関係論を論ずる必要がある。

次に、「言語表現」レベルでの問題として、幼児の発話の指示的意味を明確に規定することが必要である。事例の中にも、父親が“何してるの?”という質問に対して、“チャ、チャ”といった答えを提出している例があつた。

3つ目に、鈴木 (1986) で提出した「標識」の発達と、「基盤」の変化、それに「対象の類型化」を絡ませた、「標識」×「基盤」×「対象カテゴリー」といった総合的分析・考察が必要であろう。さらには、「場／状況」の要因を加えた検討も必要なのである。1つの手法として、1つ1つの事例を、こうした要因をふまえながら、綿密に分析していき、かつ1つ1つを今度は逆に、「統合」し、「組み立て」ていく方法がある。

1つ1つの事例は、「具体的」、「個別的」、「1回の」であると同時に、それらが時間的・空間的に「展開していく」様を、リアルに描いて行く必要があるのである。

観察・記録の方法論としては、幼児の自発的な「見立て」、「再命名」を収録しながら、同時に、「小実験」をおこない、幼児の意識に可能なかぎりせまっていく方法が必要である。

最後に、レトリックの「認識論」を構築し、それにもとづいて、発話を含む表現全体を追及していくことが、「ことば」と「認知」を含む総合的な幼児の認識論研究の1つとならう。

引用・参考文献

- 1) Billow, R.M. (1981) Observing spontaneous metaphor in children. *Journal of Experimental Psychology*, 31(3), 430-445.
- 2) Gentner, D. (1988) Metaphor as structure mapping: The relational shift. *Child Development*, 59, 47-59.
- 3) 岩田純一 (1991) 比喩理解の発達, 芳賀 純・子安増生, 共編『メタファーの心理学』誠信書房
- 4) Mac Cormac, E.R. (1985) *A cognitive theory of metaphor*. Cambridge: The MIT Press.
- 5) Mendelsohn, E., Robinson, S., Gardner, H., & Winner, E. (1984) Are preschooler's renaming intentional category violations? *Developmental Psychology*, 20(2), 187-192.
- 6) 村上芳巳 (1985) 隠喩の理解のために, 神戸大学大学院教育学研究科修士論文要録III, 8-9.
- 7) 中村明 (1991) 日本語レトリックの体系, 岩波書店
- 8) 大竹信子 (1985) 幼児の比喩生産と理解, 日本教育心理学会, 第27回総会発表論文集, 144-145.
- 9) 大竹信子 (1986) 幼児の比喩表現の理解, 日本教育心理学会, 第28回総会発表論文集, 100-101.
- 10) 佐藤信夫 (1978) レトリック感覚, 講談社
- 11) 瀬戸賢一 (1986) レトリックの宇宙, 海鳴社
- 12) 鈴木情一 (1985) 幼児期初期における比喩的命名—直喩について—, 日本教育心理学会, 第27回総会発表論文集, 262-263.
- 13) 鈴木情一 (1986) 2歳児の比喩的再命名に関する日誌法的研究—標識化の発達—, 上越教育大学研究紀要, 第5巻, 第1分冊, 103-119.
- 14) 鈴木情一 (1987) 2歳児の比喩的再命名に関する事例的研究(2)—groundについて—, 日本教育心理学会, 第29回総会発表論文集, 48-49.
- 15) 鈴木孝子・小林順子 (1986) 幼児期におけるふりと見立て(1)—先行研究の検討—, 『人間発達研究』, 第11号, お茶の水女子大学, 14-21.
- 16) Winner, E. (1979) New names for old thing. *Journal of Child Language*, 6, 469-491.

The Diary Study of a 2-year-olds' Metaphorical Renaming

— Analysis of the *GROUND* of Similarity —

Seiichi SUZUKI*

ABSTRACT

Giving temporal new names to the familiar object is the primitive form of *Metaphoric language*, typically found in early childrens' pretend play. Winner (1979) called this temporal naming (i.e., overriding it's literal name) "*Metaphorical Renaming*". This Metaphorical Renaming requires that children give new names to things on the *GROUND*s of similarity.

This study concerned with these grounds of similarity used in early childrens' spontaneous utterances with pretending, and also with the procedure identifying them.

By following up one female child over 23-33 months of age, 464 cases of metaphorical renamings with each situational description were obtained.

The results of analysis revealed that she made use of more than 10 types of grounds and showed an following order of appearance: *Function* ⇒ *Shape* ⇒ *Sensation (tactile, olfactory) / Colour* ⇒ *Sound* ⇒ *Affect* ⇒ *Abstractive / Proportional / scene-setting / etc.* This order could be summarized roughly as proceeding from Sensorymotor function-based, to *Perception-based*, and at last to other many various features-based *grounds*.

* Division of Early Childhood Education